斎藤 勝郎です。

170120　　八十路酉年男の新春雑感を書きました。

鶏鳴に明けた 2017 年
－八十路の酉年を大事に生きよう

鶏鳴とともに２０１７年が明けた。

八十路を過ぎてこの方、こんなに早くわが干支が巡ってこようとは正直おもってもいなかった。

決して丈夫ではないこの体が両親の生きた年齢をはるかに超え、なおそれなりの元気を維持していることが夢のようであり、ありがたい。

おかげで、今年は数年ぶりに帰ってくるイギリス在住の長女も一緒に家族全員で春日大社から長谷寺一泊の初詣ができるね、と話していた。

末の長男の大学入学以来、２５年間一度も欠かさず続けてきた初詣である。

ところが、おもわぬ誤算があった。というより、自分の年齢を考えない自業自得というべきか、年の瀬を控えインフルエンザにとりつかれた。

所用で訪ねた３泊の仙台で寒波に見舞われ、無理をしたツケである。年齢は争えない。

大和路の初詣を急きょ取りやめ、近間の西播州曾根にある「鹿嶋神社」で済ませることにした。

鹿嶋神社（西播州・曾根）

囲碁会々長から新年のメール

年末から年初にかけての予定も変更を余儀なくされた。

年が明けて間もなく、欠席した社友囲碁会忘年会の報告をかねて会長のＯ氏からメールが入り、

「その後いかがでしょうか。いつもなら何らかの近況連絡があるはずなのに、インフルのこじれ、あるいは仙台を飛び越して八甲田山中で冬眠に入ったか、、、等々あらぬ心配をしております」

といってきた。とんだ迷惑をかけてしまった。

そこで、取りあえず新年の挨拶として近況報告を書いた。

Ｏさん
お心遣い有難うございます。
どっこい酉男は元気です。来週は拙著の出版祝を楽しみにしています。
仰る通りインフルエンザはこたえました。体調はなんとか戻しましたが体力、とくに脚力と頭の血のめぐり！ がこのところ格段と落ちました。実感です。
新春雑感として「鶏鳴に明けた 2017 年 ―八十路の酉年を大事に生きよう」なんて殊勝な決意表明をしようと意気込んだものの、頭が空回りするだけで手が一向に動きません。
こんなことではこれから２年間の仙台暮らしが思いやられます。
先月転入届を出してきましたが、寒中の２月はパスし、３月に７－１０日ほど、４月からは＜原則＞家内が一緒です。

豪華に咲く花
Mother Nature

Ｏさん、人は七癖といいますが、わたしには妙な癖があります。
拙文「一人暮らしの功罪」（030215）にも書きましたが、バガボンドの放浪癖もさることながら、浅慮といおうか、諸事＜これぐらい大丈夫＞と高をくくるところがあります。手抜きです。
１５年前の仙台での交通事故がそうでした。
命を落としかけた事故に遭った仙台に、この年齢でまた行く、、、、
まったく３歩あるけば忘れる鶏ですね。
そのうえ＜一人暮らし＞を心身の健康増進（維持）のチャンスにできないかとマジメに考えています。ノー天気だな、とわれながらおもいます。

「天は自ら助くる者を助く」
どこかで聞いた言葉ですが、所詮生き物の人間は自分の意志で動き、培った経験を土台にして生きるしかないのではないか、と勝手に考えているのです。
つまり自力です。
自我・意地を捨て、他力を本願として大らかに生き

る宗教者の真髄は頭では理解できるのですが、悲しいかな俗人の手に負えません。

昨年末、鶏鳴を待たずに８９歳で亡くなったカトリック修道女、渡辺和子さんの言葉「美しく老いる」（『置かれた場所で咲きなさい』第３章）が心にしみます。

新春早々ちょっとおかしなメールになりました。ごめん。　　斎 藤

仙台暮らし

青葉城跡の正宗像（Wikipedia）

今年は遅まきながら身辺整理の年にしたい。その一環として、むかし住んだ仙台の家を手離すことにした。

この機会に２年ほど古家に住んで田舎暮らしをしたいね、とかねて家族と話していた。

言いだしっぺいは、諸事に＜高をくくる＞癖にくわえ懐古趣味が高じたわたしである。

ここで懐古趣味というのは、古希の頃の一人暮らし（仙台で高年遊学）が懐かしくなって、キャンパスを徘徊したり知人を訪ねたり、はたまた動けるうちに第２の故郷の山野をあるきたいという放浪癖である。

友人Ｋ氏がこのことを心配して、高齢者の一人暮らしとはどうしたことか、理解できませんが、、、といってきた。

わたしは、

「いや＜一人暮らし＞ではないのです。
家族とも話しあって、しばらく（二人で）田舎暮らをしたくなったのです」

といってお茶を濁したが、前のめり亭主の主導であることに変わりはない。

先般、社友新年会でこの仙台暮らしが話題になった時、Ｋ氏を含む５人グループの誰かが、「みんなで押しかけるから、仙台で一杯やろう、、、」と言ってくれた。

築４０年の朽ちかけたボロ小屋に客人を招じ入れるわけにはいかないが、東北の温泉地をめぐり酒を酌み交わして親睦を深めるのは大歓迎である。

酌む友 あまたあり 乱世を酌まむ

カトリック修道女、渡辺和子さん

新春から話はカトリック世界に飛ぶ。
年齢を重ねるごとに妄想を肥大させる昨今、修道女渡辺和子さんの言葉が、「これはわたしのことではないか」と心に食い入ってくるからである。

渡辺和子さんは、よく知られるように昭和１１年の２・２６事件で、反乱軍の凶弾に倒れた教育総監・渡辺錠太郎の次女である。
雪の朝、自宅寝室を青年将校たちに襲われた。9 歳の娘は銃弾の飛び交うなか、父に守られて難を逃れた。
数年前に書いた随筆『置かれた場所で咲きなさい』(Bloom where God has planted you) が２２０万部超のベストセラーになった。
父の劇的な最期もさることながら、自らの辿った８０有余年の生涯のなかで、人生の深淵をのぞき見、試練に耐えてきた境涯を率直に綴ったからだろう。
新聞広告欄などで見た著書をいつか手に取ってみたいと思っていた矢先だった。

「つらかったことを肥やしにして花を咲かせます」
「でも、咲けない日はあります。そんな日は静かに根を下へ下へおろします」
「小さなことでも、面倒でも、一つひとつ丁寧にやりましょう、そのなかで見えてくるものがあります」

前庭に咲く花たち

老いについては、、、

「老いて不甲斐なくなった自分をまるごと受け容れ、いつくしむ、そんな自分と仲良く生きることです」
「老いは、不要になった枝を切り落として身軽になることです、意地や執着を捨て素直になる、他者に耳をかたむけ謙虚になる、成長から成熟へ、それは年輪を重ねる『成熟』なのです」

、、、などなど、珠玉の言葉に満ちている。

聖母（ノートルダム）
Wikipedia

若くして信仰に目覚め、３０歳直前で修道女会に入った。

アメリカに派遣され、帰国した直後、３６歳で岡山のノートルダム清心女子大学長に任命された。修道会は命令が絶対至上の世界である、逃げるわけにはいかない。

公職の重責に押しつぶされそうになった。うつ病をはじめ膠原病など難病諸病に悩み、堪えぬいた。

ここで、もしわたしの持論「人間は、己の培った経験を土台にして、、云々」が正しいとすれば、まさに修道女はこのことを身をもって体現した人ではないだろうか。

生きてそのまま権化、聖母（ノートルダム）になった。

「一つひとつを丁寧に」ありがたい経験として押しいただき、わが身に取りこむ。人間の基本のはずである。このことを忘れて、すぐ安易な場所に逃げこんでしまう俗人はどうしたことだろう。

「神は虚構よ、絶対者なんて嘘だ、存在するのは相対だけよ」とうそぶいて、「霊性」も否定し、すべては高度に発達した大脳さま（大王？）のおかげよ、と断じて物質世界に短絡してしまう。

この落差はいったい何としたことだろう。

今年はどんな年になるのだろう

さて、今年はどんな年になるだろうか。

八十路の年男にとって、人生最後の記念すべき酉年であることはまず間違いない。

「われ未だ木鶏たりえず」
双葉山像（Wikipedia）

闘鶏を例にとれば、最強の鶏は物に動じない（物言わぬ）「木鶏」といわれる。

７０連勝を前にして敗れた昭和の大横綱双葉山は、「われ未だ木鶏たりえず」の名言を残して土俵を去った。

言葉は千鈞の重みをもつ隻語がいいと思うのだが、今年の鶏はどうも別種のようである。

年明け早々、世界の各地から悲鳴にも似た鶏たちの騒ぐ鳴き声がかしましく聴こえてくる。

喧噪の発信源はいうまでもなくアメリカ（トランプ新大統領）の「自国第一」保護主義である。

呼応するように欧州を中心にポピュリズム（大衆迎合）が横行しつつある。
社会の分断がすすみ、格差はますます拡大して難民移民の規制どころか、増加の一途をたどるのではないか。
今年は一体どうなるだろうか。

ゴーギャンのタヒチ
(Wikipedia)

我々はどこから来て どこへ行くのか 我々は何者か

ポリネシアに原始美を求めた後期印象派の画家ゴーギャンの言葉である。
この設問がいよいよ真実味を帯びる時代なのかもしれない。

朝日の新春特集に、このゴーギャンの言葉を借りたコラムがあった。

以下にその一章を要約してみる。
有史以来、人類は紙、活版印刷、さらに新聞、ラジオ、テレビ、ネットと情報技術の変遷を経てきた。
いま情報量はデジタル化で異次元に入りつつある。ロボットが登場し、自分で選択し判断できる【自律した人間】を標榜してきた近代西洋社会の理想がいま崩れかかっている。
最終的には人間が決めるという前提で、初期選択はロボットに任せればいいという＜無責任な＞識者までいる。
果たして人類は、これから際限なく広がり続ける情報の大海を泳いで行けるのだろうか、、、、

老いということ
（友の年賀状から）

老いには勝てないという。しかし渡辺和子さんは、それは違うという。
老いは神の賜物なのだと。重ねる年輪が人間としての「成熟」をもたらすのだとも。
そこには自我や意地とは無縁の、大らかな謙虚に満ちた和みの世界が広がっている。
肩の荷を下ろしましょう。老いは稔りと感謝の季節なのだから、と修道女は

いう。

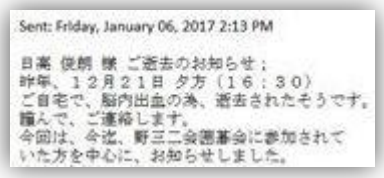
以下、友から届いた年賀状を順不同で読み解いてみたい。
一葉一葉、、、賀詞の行間に、書いた人の＜心のうち＞が読みとれる。よき友を持った人生のしあわせに包まれる時間である。
この至福の時間に浸り、そして静かに年賀状を介して＜おもい＞を共有してみよう。わたしのとってはじめての経験である。
これは八十路酉年男の特権ではないだろうか。特権として押しいただかねばなるまい。

M氏からの年賀状とH氏の訃報

新年おめでとうございます

昨年の旅行は、二月、さっぽろ雪祭り観光から始まりました。北海道は、何回もスキーや観光で行っているにも拘わらず、チャンスが無く、何時か是非体験したいと考えていました。大迫力の巨大雪像と各種ショーを大混雑の中で観光、夕食後はライトアップされた「すすきの」の六十基の氷像や、比較的空いてきた「大通り」で、ゆっくり市民雪像等、各種雪像を直ぐ近くで十分鑑賞、満喫。
五月には、延十二回も実施した「高校同期海外旅行会」の締めくくりとして、台ワイ四島へ、八万トンの大型豪華クルーズ船に六泊泊で、ゆっくり回るツアーに参加。（わが会以外は一組の「夫婦のみで、略専用ツアー」）。平均年齢八十歳以上にも拘らず、大騒ぎで船内ベットや島内観光を満喫。最後は真珠湾観光。
図らずもアリゾナ記念館往復で安倍首相より先行？、運行の兵士と交流？、八月には、木曽川で鵜飼、京都で、舞妓さん接待の京料理、書船川床料理、人力車での嵐山周辺観光等と、ちょっとデラックスな旅を楽しみました。
十一月には、戦争終結一年前に設置された、慶大日吉キャンパス地下にある、「旧日本軍連合艦隊司令部」が置かれた地下壕見学、資材不足、突貫工事にも拘らず、大変巧妙に設計された配置と、直撃弾にも耐えられる頑丈な構造に、びっくりしました（三箇所に分かれ、全体では5㎞もあった由）。ここから、レイテ沖作戦や戦艦大和の出撃指令等々、全て暗号無線で行ったそうです。

平成二十九年　元旦


Sent: Friday, January 06, 2017 2:13 PM

日高 俊朗 様 ご逝去のお知らせ；
昨年、１２月２１日 夕方（１６：３０）
ご自宅で、脳内出血の為、逝去されたそうです。
謹んで、ご連絡します。
今回は、今迄、野三二会懇話会に参加されていた方を中心に、お知らせしました。

大学友人M氏は稀代の旅行家である。マルコポーロかマテオリッチ顔負けである。
いただく年賀状はいつも前年の旅の行程で埋めつくされる。
賀状に続いてＨくんの訃報を知らせるメールが入った。

えっ、あんなに元気だったＨくんが！
人の命はいつどうなるか分からないと知りつつも、まったく驚いてしまった。３年前に野三二会で親しく話しこんだことが、いまは懐かしい。
今年は年男にあたるためか、頂く賀状の一枚一枚に心うたれる。賀詞にこめられた友の想いを丹念に拾い上げ、わがおもいを載せてみたらどうなるだろうかと、柄にもなく殊勝な気持ちになっていたところだった。
ご冥福を祈るばかりである。

大阪在住の大学友人Ｉ氏

Ｈ君の訃報をうけて、すぐ大阪の友人Ｉ氏にメールを入れた。
２－３か月ごとに交友を重ねる関西でただ一人の大学同期の友人である。

Ｉさん、、、

明けましておめでとうございます。

年が遷るこの季節になると、例年のことですがメディアには考えさせられる記事があふれます。朝日にはゴーギャンにちなむ連載コラムが、

「我々は何処から来て 何処へ行くのか 我々は何者か」

と。

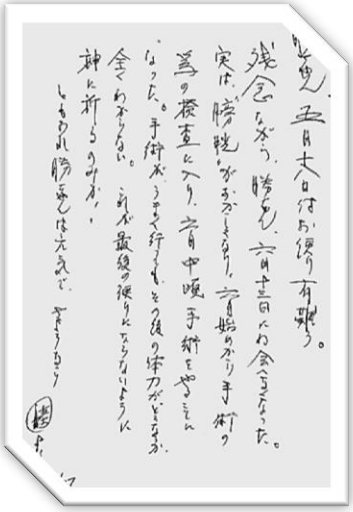
難しいことは抜きにして、このところ友人から届く賀状の一つひとつが心にしみます。八十路年男だからでしょうか。

老いと病のことが殆どですが、これは避けて通れない人間の宿命ですから、せめて賀状に託された＜おもい＞を共有することで癒すとしましょう。

そんなことを考えているところに、さっきあんなに元気だったＨ君の訃報が！！

ご冥福を祈りましょう。

「睦ちゃん」の予後が気にかかる


拝啓 五月末日はお便り有難う。
残念ながら、勝ちゃん、六月末日に会へなくなった。
実は、膀胱がんがぶくぶくなり、六月始めから手術の
為の検査に入り、六月中旬手術をやることに
なった。手術がうまく行っても、その後の体力がどうなるか
全くわからない。これが最後の便りにならないように
神に祈るのみだ。
しかし勝ちゃんは元気で、がんばるよう
睦より

大学友人「睦ちゃん」は、わたしと＜睦ちゃん＞＜勝ちゃん＞と呼びあう親友である。

昨年６月、膀胱摘出手術のあとの予後に自信がないらしく、

「これが最後の便りにならないことを神に祈る、勝ちゃん元気で、さようなら、、、睦より」

と書いたはがきが舞い込んだ。

初期認知症の夫人と二人暮らしをしている。

近くに医師の息子がいるので、わたしは取次ぎを期待して２度ばかり見舞いの手紙を書いた。

が、未だに音信不通である。

多分、いい話ではないのだろう。

越後親不知の秀才一家だった。

５つ上の兄は最難関の海兵に合格し、村人たちは、

「おらが村から未来の提督が出る」

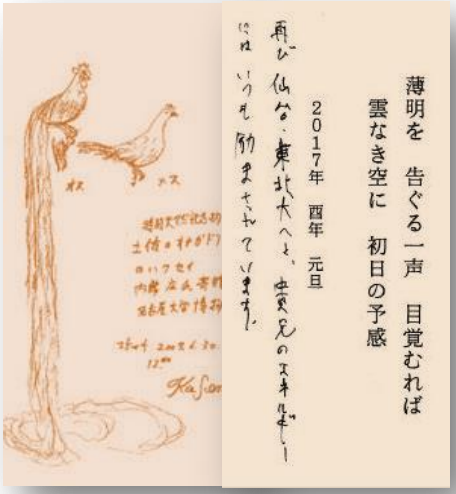
と、提灯行列で江田島に送り出した。

が、卒業間もなく鹿屋基地を飛び立ち、南海の藻屑と消えた。

零戦特攻機（知覧特攻記念館）

「勝ちゃん、俺の兄貴のことをよく書いてくれて、ありがとうよ、、、」
涙ながらに何度いわれたことだろう。誠実・律儀な友人である。

夫人のことで、こんなことも聞いた。
ちょうど１年前、ねだられて自身の体調不良をおしてウィーンのカジノを訪ねたらしい。ドイツ駐在の頃、夫婦でウィーンのルーレットにはまっていた。
カジノで急に夫人が、
「家に帰りたいからタクシーを呼んでよ、、、」
と言いだして往生したとか。ウィーンからタクシーで東京まで帰れるかいな！
睦ちゃんは心優しい男である。



根室産の大学友人Ｓ氏

歌を詠み、絵を描くＳ氏は、定年後、睦ちゃんを含む５人グループで年２回の旅を重ねた仲間である。
脚の不調もあって古希の頃を最後に旅から遠ざかっているが、歌ごころ、絵ごころは衰えを知らないようである。
好漢自重さらなる向上をめざされよ。

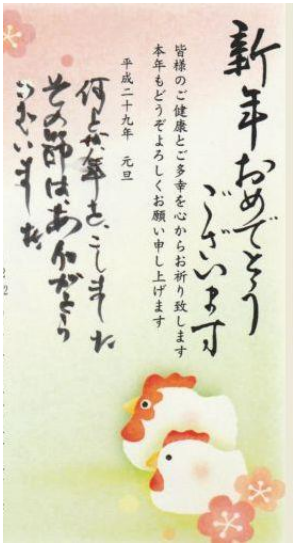
Ｓ氏は北方四島を望む日本最東端の根室・納沙布で霧笛を聴いて育った。
１０年ほど前だったか、オホーツク流氷ツアーをまわったことがある。
最果ての岬に立ち、頬っぺたを赤くして酷寒の街を走りまわったろう少年Ｓくんにおもいを馳せた。

納沙布の　霧笛きこえる　丘にたち
友の育ちし　厳冬やいかにと

人はタンポポの冠毛のように風にのって飛んでいき、落ちたところに根をおろす。意志的に、あるいは風の吹くままに。

Ｓ氏はいま名古屋に自適している。
わたしもまた東北の片田舎から飛びに飛んで、関西に棲んでいる

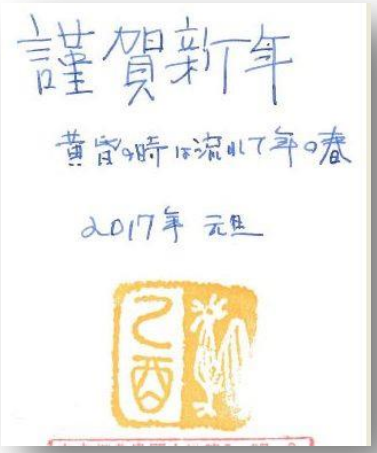
仙台の隣人Ｓ氏



友人Ｓ氏の名は昭八、昭和８年生まれの＜同年兵＞だ。４０数年前の仙台勤務時代に町内会で知りあった。
以来、折に触れて交友を深めてきたが先般、久闊を詫びるべく家を訪ねたところ、病が末期状態であることを知って愕然とした。
Ｃ型肝炎との付き合いが長かったが、がん化した。

年賀状に、「何とか年をこしました、、、」と書いてある。Ｓ氏の切ない心のうちが伝わってきてやりきれない。
何とか持ちこたえてほしいと願っている。
３月から仙台に移り住むので、ときどき会おうと便りを書いた。

高校友人の山男、Ｙ氏



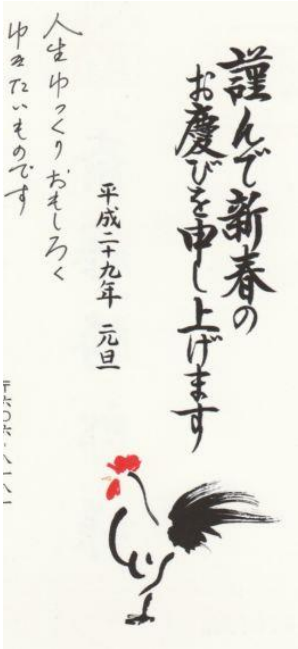
黄昏の　時は流れて　年の春

東京在住の友人山男・Ｙ氏から届いた年賀状には病と闘う切ないおもいがにじんでいる。
昨年来、がんの治療で入退院を繰り返していたため、見舞いの機会を逸していた。

定年後の１０数年、ヒマラヤ級の山男がわれわれを引き連れてあるいた山は数しれない。
きっかけはある年の酒田東高同期会のときだった。山の話に興じる山男たちの輪の中にいて、わたしが「山男はいいね～」と羨望の声をあげると、
「なら今度、裏磐梯に来ないか、、」
といわれて飛びついた。
その後、蓼科山など信州高原をはじめ、伊豆高原、尾瀬が原、蔵王などから西日本は紀伊山地に及んだ。

彼ほどの山男なら、抗がん剤も辛かろうが遠からず復帰して、また山に行こうと元気に言ってくれるに違いない。そうあってほしいと願っている。

庄内藩ゆかりの友人Ｆ氏



高校友人Ｆ氏は年賀状に、

【人生ゆっくりおもしろくゆきたい】

と心境を吐露する。

幕末の出羽庄内藩・松山支藩城代家老の血を引くＦ氏は曾祖父の＜おじいちゃん＞（松森胤保翁）に似ているようだ。血は争えない。

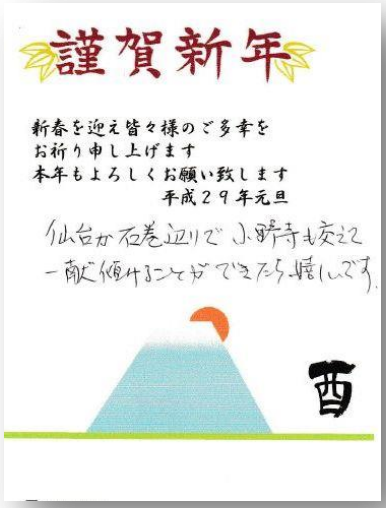
親藩の家老だった「おじいちゃん」は戊辰戦争を戦った人だが、その後、趣味が高じてメンデルやダーウィンのような偉人学者になった。＜日本のダビンチ＞ともいわれたそうだ。

奥羽人類学会長をつとめた「おじいちゃん」は独自の進化説『万物一系理』で理論武装した。

ミッシングリング（失われた環）なにするものぞとばかり、すべての生物は宇宙開闢いらい繋がっているとして、万物を＜おもしろおかしく捉えた＞人だったようだ。

「おじいちゃん」の血がＦ氏にしっかりと繋がっているのかもしれない。　　松森胤保翁

右）松山文化伝承館の前庭に建つ松森胤保翁のブロンズ胸像（写真提供＝松山文化伝承館）左）軍装の胤保翁（戊辰戦争当時）（松森写真館所蔵）



屋根の上の小野寺氏

Ｏ氏（尾坂氏）からの賀状に、「仙台か石巻辺りで小野寺も交えて一献傾けることができたら嬉しいです」と書いてある。

小野寺氏はＯ氏の学生時代からの親友である。東日本大震災の時、ＮＨＫ特集に友人小野寺くんが出るから見てほしいとＯ氏からいってきた。

仙台ゆかりのわたしは他人事とは思えず被災地の宮城・女川に飛んだ。

夫妻の語る生々しい光景は今でも目に焼き付いて離れない。

小野寺氏の家の裏手に高さ３０メートルほどの石段があり、上れば裏山である。彼はすぐさま家族を促し、石段を駆けあがった。

が、家の戸締りが気になって、夫人の制止を聞かず石段を下りた。そこを津波に襲われ、逃げる間もなく屋根に上ったが数分後、ギギーッと家ごと持ち上げられ、そのまま山側に流された。

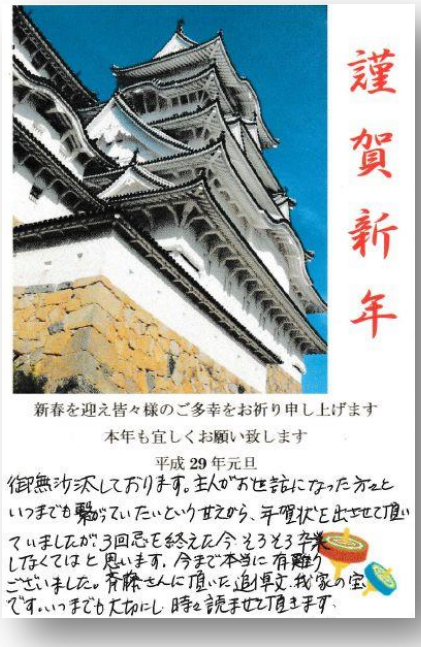
「船、山に上る」、、、１５分後、引き波となった津波は猛々しく牙をむき、家が家をなぎ倒していく。小野寺氏は屋根から振り落とされまいと必死に棟瓦につかまった。

高台にいた夫人は屋根の上の主人を見つけ、泣き叫びながら手をふった。彼もまた手をふった。我を忘れて別れを告げたのだろう。悲しすぎる光景である。

しかし奇跡が起こった。女川湾に流された小野寺氏は無人のボートを見つけ、瓦礫をわたって乗り移り数時間後、漁船に救助された。

奇跡の生還を果たしたのだ。

今度仙台に行ったらぜひ会いたいとおもう。



故山本精一郎氏夫人からの賀状

一昨年に亡くなった山本精一郎氏の未亡人から年賀状が届いた。亡きご主人をおもう心根にあふれている。

現役時代、企画人事の要職を担ってきた精一郎氏は、絵に描いたような誠実と情熱の人物だった。

同窓大先輩の作家・城山三郎を敬愛するあたりは、人格が作家と共通するところがあるからだろう。

過度の喫煙、飲酒がもとで体調を崩し、多病な６０代を過ごして逝った。

夫人は、しかし、

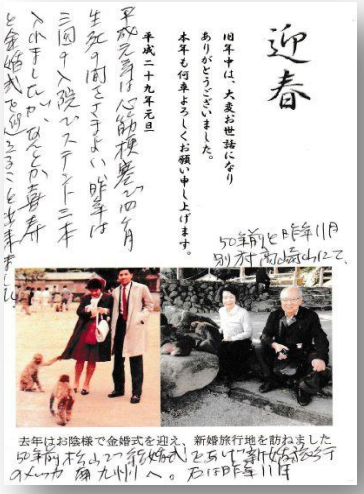
「精一郎は精いっぱい生きました」
と晴れやかに言っていた。
自然が好きらしく、望遠カメラを肩に近くの自然公園を飄々とあるく精一郎氏によく出遭った。その姿は漂泊の俳人・種田山頭火その人に見えた。
山頭火に似ていますねというと彼は照れて、自然体で生きる山頭火が好きなんです、とよくいったことを覚えている。

日暮れて　宿もなし　百舌鳥が鳴く
うしろすがたの　しぐれてゆくか

山本精一郎写真集から
「夕日を背にして歩くカニ」

いまでも播州の沼沢で野鳥を追う穏やかな精一郎氏のスリムな姿が目に浮かんでくる。

社友囲碁会友人Ｓ氏は信念の人



Ｓ氏から頂いた年賀状を見てこころが和んだ。
いまどき、新婚と金婚式の写真が年賀状に仲よく並ぶとは、なんと幸せな人だろう。それも同じ豊後高崎山でサルと戯れている。
＜いまどき＞といったのは、わたしの場合、大昔に撮った写真など家探ししても見つからない、そんなのあったろうかと、、、

数年前、二人で八十八か所の阿波路をあるいたことがあった。
みちみち、Ｓ氏の話を聞いたわたしは驚くやら、敬うやら、、、、
５０歳のとき心筋梗塞で倒れて地獄を見たというが、以来２５年間、須磨鷹取山の早朝登山に励んでいる。夏場は４時半起床とか。
信念と努力の人にちがいない。
諸事に手抜きをしてしまうわたしなど、眩暈がして、遍路行も２泊３日で切り上げた。

１６番観音寺で

Ｓ氏はそれから単独 1 週間続行し、室戸岬から調子を上げて黒潮の海風に吹かれながら、なんと安芸～高知～須崎へ。

さらに中村（四万十）の手前３７番岩本寺まで足をのばした。ビックリ仰天した。

身にまとうお大師さん特製の白装束をひるがえし、風のように道を急ぐ修験者の姿が目に浮かんでくる。事実、あるく姿は＜一歩一歩丁寧に＞（修道女）力強く大地をとらえ、堂々としていた。

Ｓ氏の体力、脚力と気力に圧倒された。

「自然と人生」－蓼科高原のＫ氏

定年後、Ｋ氏は信州蓼科高原にこもっている。

５０年ほど前、１９人の徒党を組んで途中入社してきた若き精鋭の一人だった。

当時、社員の教育係を担当したわたしを指して、Ｋ氏は先生とか師匠と呼ぶ「恩義」の人物でもある。

Ｋが、も一人いた。

前出（ｐ３）の気配りＫ氏である。

前者が物語り上手で未だに社友会の総合司会をつとめるなら、後のＫ氏は文章家である。

何でも、あっという間にまとめて整理してしまう天才だった。

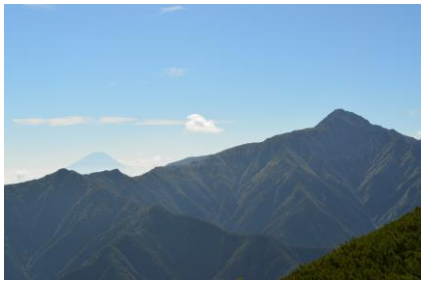
二人とも現役を上りつめて、一人は信州の隠者に、一人は大学客員教授である。よき半生ではある。

信州から届いた便りによると、Ｋ氏は単独近隣の荒れた雑木林を切り拓いて小径をつくり、好みの樹木を養って散歩道にしたそうだ。

年賀状に、

「若草は萌え、小川の流れは緩やか、
にわとりは地面と戯れ、切り株に座
する私も仲間」

とある。



『自然と人生』を愉しむ余裕が感じられ、切り株に座し、まるで一茶のようににわとりと遊ぶ

Ｋ氏が目に見えるようだ。

われと来て 遊べや親の ないすずめ

語り上手は詩人であり哲学者でもある。絵も自分で描いに違いない。
こんど会ったら、
「あなたは徳富蘆花のファンかいな、似てるところがあるね、、、」
と訊いてみたい。
　洒脱なＫ氏のこと、まんざらでもないような顔つきで、「そんな、アホな～」といって笑うかな。

夫人の介護にいそしむＹ氏

　Ｙ氏とは４０年来の付き合いである。
　新潟時代、販社とメーカーの違いはあるが同じ立場の課長で同じビルにいた。
　よく二人で出張もした同僚といっていい。
　山を愛するプロ級の写真家でもあった。
　お互い関西に戻ってからも交友が続いていたが、ここ数年、体調不良の夫人の介護に専念しているため、お互い通信を遠慮していた。
　年賀状で、二人並んでにこやかに笑っている写真に、Ｙ氏の穏やかな人柄が表れていて安堵している。
　いずれ、共通の友人M氏を介して再会できる機会を待ちたい。

奥穂高岳ジャンダルム
Ｙ氏撮影